

2020 年度

国 語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受 験 番 号	
------------------	--

*解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① たくさんヒニクを言われた。
- ② 実家の畑をタガヤす。
- ③ フクザツな問題を解く。
- ④ コウゴウ陛下のお話を聞く。
- ⑤ 山のイタダキに立つ。
- ⑥ 十円はドウカである。

問二 次の漢字の部首を書き、その部首名をひらがなで答えなさい。

街

問三 次のの中から意味が似ていることばを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、親切
- イ、大切
- ウ、同意
- エ、厚意
- オ、同情

問四 次の□に同じ漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

□人□色

問五 次の□に生き物の名前をひらがなで入れて、文章を完成させなさい。

私は□の子の貯金を大事にしている。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

——俺も部活だったら試合にも出れたのにな。

——ミスしても何も言われない俺よりは、まだよくな？

克彦の言葉がフラッシュバックした。

かつちゃん、ここ、踏ん張れよ。

分かってるか。もし止めたなら、俺たち、勝てるんだぞ！

言いたかったが、余計にプレッシャーをかける気がして言葉に出来なかった。

まもなく、ホイッスルが鳴り響いた。

これが最後の攻防になるはずだ。

克彦はゴールの下、ひとり立った。このときキーパーは、最高に孤独だ。仲間の援護はない。キーパーは出来るだけ腕を広く

伸ばして、キッカーに対してゴールを少しでも狭く見せようとするのだが、克彦の腕は頼りなげに萎縮していた。

ピッチから、ベンチから、応援席から、全ての視線が一点に集まった。

周斗はつばを飲みこもうとしたが、からからに乾いた口の中には一滴のつばもなく、喉の奥がひきつれた。

敵のキッカーは何度もボールの位置を確かめていた。PKは点を決める方が圧倒的に確率が高いわけだから、キッカーの方こそ

プレッシャーで押しつぶされそうになっているはずだ。

キッカーは両肩を上下させて深呼吸したかと思うと、助走に入った。左脚を踏み込み、右脚で蹴り上げた。

やった！

周斗は胸の中で叫んだ。

ボールは克彦の真正面に飛んだ。ミスキックだ。誰もがキャッチできると思った。キャッチできるボールだった。

しかし、胸と両手で押さえ損なつたボールは、そのまま跳ね上がった。バウンドしたボールは、無残にもゴールネット上方をくらりと揺らした。敵の選手たちが、キッカーのもとにわっとかけ寄つた。

そこで、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。引き分けだけど、ベルーガSCは逆転勝利したような喜びようだった。FCレックの選手たちは脚をひきずるようにして、審判の脇に整列した。克彦の顔は死人のように青ざめていた。

もともとPKを取られてしまったのは運だ。失点が誰のせいとか、そんなことは言いたくない。でも、でも……今のボールは捕れただろ。

周斗は歯ぎしりの音が出そうなくらい、奥歯をぎりりと噛みしめた。

試合終了後の柴山コーチの話は、おおむね選手たちの動きをほめていた。でも周斗の耳には何も残らなかった。

「さあ、次の公式戦は二週間後だ。次こそ勝利を勝ち取ろう」

気付くと締め言葉になっていた。

「ハイ！」

周斗はみんなの返事に出遅れてしまい、そのまま黙っていた。

挨拶が終わると、蓮は応援に来ていた両親とすぐに車で病院に向かった。応援席をちらりと見ると、もう父さんの姿も克彦の母親の姿もなかった。早々に退散したらしい。

注2
周斗は慥然としたまま、スパイクの紐をゆるめた。ふと気付くと、みんなが周りにいない。知らないうちに、少し離れたところで輪が出来ていた。輪の中心は克彦だった。右腕で目を覆っている。

あいつ、泣いてんのか？

何とかおさめようとしていた怒りが、予告なくはじけ飛んだ。同情なんか一ミリも生まれなかった。

周斗はみんなが集まっている輪に近づいた。

「克彦、ドンマイ。切り替えて、次、頑張ろうぜ」

大地が克彦の肩に手をのせた。② 克彦はその言葉に余計に嗚咽した。

「そうだよ、かつちゃん。誰だってミスするし」

「俺たち、いい線いったよな」

「うん、惜しかった。次は勝てるんじゃないか」

選手たちが克彦を慰めようと、次々に「A」にした。

「なあ、今日は勝てなかったけど、負けなかったわけだし、帰りにみんなでどっか行かね？ かつちゃん、行こうよ」
歩が言った。

周斗は愕然とした。くちびるが震えそうだった。

お前ら、悔しくないのかよ！ 勝ちたくなかったのかよ。勝てた試合なんだぞ。お前らにとって今日の試合は、それくらいのものなのかよ。

「かつちゃん」

周斗の低く突き刺すような声に、みんながいつせいに振り返った。

「俺はミスを責める気はない。だけど、お前は最初からやる気なかったよな。ゴールを死ぬ気で守ろうと思ってなかったよな。俺が許せないのは、そこだ！」

克彦を励まそうとみんなが盛り上げていた空気が、一気にドンと突き落とされた。克彦は目に当てていた腕をといた。

「周斗、いいから」

大地が言うのを、周斗は遮った。

「お前、もうやめろよ」

その瞬間、克彦の真つ赤な目が見開かれた。

「サッカーなんか、やめちまえよ」

場が凍り付いた。克彦の瞳の奥が鈍く光った。

「周斗、な、何言ってるんだよ。言い過ぎだぞ」

歩が克彦と周斗の間で視線を何度も往復させた。克彦は突然、ダツと駆け出した。

③「かっちゃん、どこ行くんだよ」

みんなが追いかけてよとするのを、大地は手で制した。重苦しい空気が選手たちを包んだ。狭い空間にいるわけではないのに息がしづらい。

「周斗、お前さ。何様なんだよ」

ふだん穏やかな光貴が静寂を切った。周斗の胸がビンと震えた。

「は？」

動揺を隠すように、周斗は光貴を思いつきりにらみつけた。

「お前ひとりですサッカーやってんじゃないんだよ」

光貴が吐き捨てるように言うと、歩まで加勢した。

「周斗ってさ、かっちゃんとか俺とか控え選手のこと、正直馬鹿にしてね？」

ムードメーカーでお笑いキャラの歩の目は、笑ってなかった。周斗は一瞬言葉を失った。

馬鹿にしているつもりはなかった。でも、《X》は感じていなかったか？ それって馬鹿にしていることになってしまうのか？ 歩に心を見透かされた？ いや、そういうのとは違う……。

心がザワザワしてきた。

④「そんなわけ、ないだろ」

反論する言葉は弱々しかった。

「いや、してる。でなきや、かっちゃんにサッカーやめる、なんて言えるか」

歩がだんだん激昂^{注4}してきた。

「それに、周斗の態度はいつも、」

光貴が追い打ちをかけようとすると、大地が遮った。

「もうやめろ。俺たち今仲違いしている場合じゃないだろ。次の試合は二週間後だぞ」

大地のひとつことで、静かになった。気まずい空気が続くなか、周斗はリュックのところにもどってスパイクを履き替えた。

着替えを黙々とすませると、何も言わずにその場を立ち去った。みんなの視線が背中に刺さっているような気がしたが、振り向くことは出来なかった。

光貴や歩が自分のことを、^⑤あんな風に思っているとは知らなかった。それに他のメンバーは黙ったままで、誰ひとりとして周斗の味方になつてくれなかった。

試合会場のグラウンドから最寄りの駅まで、大股で歩いた。

何度か来たことのあるグラウンドだったが、ひとりで帰ることはなかった。自宅のある駅が同じの克彦とはいってもいっしょだった。

「周斗、帰ろうぜー」といういつもの声が、頭のなかに響いた。駆け出して行った克彦の後ろ姿が目に見えかぶ。

やっぱり、言い過ぎだな。でも……。

勝手に飛び出してしまった言葉を取り戻したい気持ちと、あれはやっぱり仕方がなかったという気持ちがちやまぜになった。考えごとをしながら歩いていたせいで、赤信号をわたりかけていた。

車に派手にクラクションを鳴らされ、あわてて歩道に後ずさった。危うく接触するところだった。背筋が 1 した。そのとたん、急に克彦のことが心配になった。

かつちゃん、大丈夫か？

周斗はリュックからスマホを掴み出したが、克彦が何も持たずに駆け出したのを思い出して、リュックに投げ入れた。かつちゃん、どこ行つたんだろう。かつちゃんが行きそうなところって……。

克彦はクレイジーゲームが得意だったが、まさかゲームセンターに行つたとは思えない。

いや、もうグラウンドに戻っているんじゃないか。

周斗は早足でグラウンドに引き返しながら、ふと【B】を止めた。

去年の夏、この試合会場に来たときのことだ。噴水がある公園を見つけて、みんなで立ち寄ったのを思い出した。

あんまり暑い日だったので、噴水池で水遊びしてみたくなった。駅に着いたとき、最初はみんなでいっしょだったから、びしょびしょなのも恥ずかしくなかった。けれど、最後は周斗と克彦だけになって、

「俺ら、マジ浮いてね？」

「しかもこの電車、冷房利き過ぎ。寒っ」

と、笑い合ったのだ。

あの噴水公園にいそうな気がする。いや、絶対にいる。

確信めいたものを感じて、周斗は噴水公園にまっしぐらに向かった。そして、克彦に会ったら、傷つけるような言い方になってしまったことを、まずはあやまろうと思った。

やがて公園の中央の噴水が見えた。その噴き上げられた水しぶきの向こう側に、かげろうみたいに揺れる水色のユニフォームの背中が見えたとき、ホッと肩を下ろした。口もとに笑みが浮かんだ。

だが、丸い噴水池にそって近づこうとしたとき、**2** 歩みが止まった。さっきは克彦の背中で見えなかったが、その向かいにはもうひとり水色のユニフォームを着た選手がいた。

大地だった。

大地は、克彦に何か話しかけている。克彦は最初うつむいていたが、突然顔を上げると、大地の顔をまっすぐ見た。食い入るように**3** 見ている。やがて大地は、克彦の肩に手を回してポンとたたいた。それが合図だったかのように、ふたりはグラウンドの方に向かって並んで歩き出した。

周斗は呆然とふたりの後ろ姿を見送った。

去年の夏はまだいなかった大地が、どうして噴水公園にあたりをつけたのかは、分からない。他のメンバーに聞いたのかもしれないし、克彦自身が以前大地に話したことがあるのかも知れない。ただ明らかなのは、周斗よりも先に、大地が克彦を見つけ

たということだった。

つまらないやきもちだつて分かっている。でも、大地に対する《 Y 》めいたものは抑えようがなかった。

(佐藤いつ子『キャプテンマークと銭湯と』〈KADOKAWA〉より)

注1・フラッシュバック：過去のできごとがはっきり思い出されること。

注2・慥然：失望や不満でむなしくやりきれない思いでいるさま。

注3・愕然：ひどくおどろくさま。

注4・激昂：ひどくおこること。

問一

1

3

《 1 》《 3 》に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、じつと イ、やつと ウ、ぞつと エ、そつと オ、はたと

問二

〔 A 〕〔 B 〕に入る体の一部を表すことばをそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問三

《 X 》《 Y 》に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

X ア、充実感 イ、達成感 ウ、責任感 エ、優越感
Y ア、挫折感 イ、敗北感 ウ、失望感 エ、不信任感

問四

——線部①「余計にプレッシャーをかける気がして」とあるが、克彦がプレッシャーを感じているようすをあらわしている部分を文中から二十字以内で探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問五

——線部②「克彦はその言葉に余計に嗚咽した」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ミスしてしまった自分が次の試合に頑張れるはずなどないと思ったから。
- 2、やはり自分はミスしても責められないのだとおさらみじめになったから。
- 3、表向きは慰めの言葉であるが、実は責められているように感じられたから。
- 4、自分を励まそうとする優しい言葉に、いっそうつらくなってしまったから。

問六

——線部③「みんなが追いかけてよとすることを、大地は手で制した」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、みんなで追いかけたら余計に克彦を追いつめることになってしまうから。
- 2、克彦を慰めてやれるのは自分しかいないので後で一人で行くつもりだから。
- 3、傷ついた克彦はしばらくそっとしておいてやった方がいいと思ったから。
- 4、克彦にも反省すべき点があるので少し頭を冷やす時間が必要だと感じたから。

問七

——線部④「反論する言葉は弱々しかった」とあるが、このときの周斗のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、思いもかけずみんなから責められたことで、自分の言動に自信が持てなくなっている。
- 2、怒りにまかせてみんなを刺激するようなひどい言葉を言ってしまい、後悔している。
- 3、自分の心の奥底にある気持ちを見透かされたことで、すっかり動揺してしまっている。
- 4、正しいことを言っているのに反論され、もはや言い返す気力を失ってしまっている。

問八 — 線部⑤ 「あんな風」とあるが、それはどのようなことを指しているか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑥ 「周斗は噴水公園にまっしぐらに向かった」とあるが、このときの周斗のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、すぐにも克彦を探し出さないと大変なことになってしまうとあせりを感じている。
- 2、ほかの誰よりも先に自分が克彦を見つけ出すのだと競争心をむき出しにしている。
- 3、克彦の居場所^{ところ}に心当たりがあり早く駆けつけようとはやる気持ちを抑えきれずにいる。
- 4、やはり自分が一番克彦のことをわかっているのだと気持ちを浮き立たせている。

問十 「大地」の人物像として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分の実力^{じりき}に自信を持ち、自分の価値観^{かちかん}ですべてを判断しようとする人物。
- 2、いろいろなことに配慮^{はいりよ}の行き届いた、みんなから信頼^{しんぱい}されている人物。
- 3、普段^{ふだん}の生活では調子^{ていし}がいいが、大事なところではしっかりしている人物。
- 4、集団の中で絶対的^{けんたい}な権威^{けんい}を持ち、その実力でみんなを圧倒^{あつぱく}している人物。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「経済」と聞いて、どんなことを思い浮かべるだろうか？

コンビニでお金を払ってチョコレートを買うことは、まぎれもなく経済活動のように思える。では、そのチョコレートをバレンタインの日に好きな人に贈ることは、経済活動に入るだろうか？

この行為は、ふつう「経済」とは異なる領域にあると考えられている。「チョコレート」というモノが、同じように人から人へと動いていても、一方には「経済らしさ」があり、他方には「経済らしさ」がない。その「経済」のリアリティをつくりだしているのは、なんなのか？

① ほんのささいな日常の行為のなかで、ぼくらが現実をつくりあっていることを、身近な「経済」の事例から確認していこう。

店で商品を購入するとき、金銭との交換が行われる。でも、バレンタインデーにチョコレートを贈るときには、その対価が支払われることはない。好きな人に思い切つて、「これ受けとってください」とチョコレートを渡したとき、「え？ いくらだったの？」と財布からお金をとり出されたりしたら、たいへんな屈辱になる。

贈り物をもろう側も、その場では対価を払わずに受けとることが求められる。このチョコレートを「渡す／受けとる」という行為は贈与であつて、売買のような商品交換ではない。だから「経済」とは考えられない。

①、ホワイトデーにクッキーのお返しがあるとき、それは「交換」になるのだろうか。この行為も、ふつうは贈与への「返礼」として、商品交換から区別される。たとえばほとんど等価のものがやりとりされていても、それは売買とは違う。② 考えられている。

商品交換と贈与を区別しているものはなにか？

フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、その区別をつくりだしているのは、モノのやりとりのあいだに差しはさまれた「時間」だと指摘した。

- 1 このとき、やりとりされるモノの「等価性」は伏せられ、「交換」らしさが消える。
- 2 ところが、そのチョココレートの代金に相当するクッキーを一ヶ月後に渡したとしても、それは商品交換ではない。
- 3 たとえば、チョココレートをもらって、すぐに相手にクッキーを返したとしたら、これは等価なものを取引する経済的な「交換」となる。

4 返礼という「贈与」の一部とみなされる。

商品交換と贈与を分けているものは時間だけではない。お店でチョココレートを購入したあと、そのチョココレートに値札がついていたら、かならずその値札をはずすだろう。さらに、チョココレートの箱にリボンをつけたり、それらしい包装をしたりして、「贈り物らしさ」を演出するにちがいない。

店の棚にある値札のついたチョココレートは、それが客への「贈り物」でも、店内の「装飾品」でもなく、お金を払って購入すべき「商品」だと、誰も疑わない。

なぜ、そんなことが必要になるのか？

ひとつには、ぼくらが「商品／経済」と「贈り物／非経済」をきちんと区別すべきだという「きまり」にとっても忠実だからだ。この区別をとおして、世界のリアリティの一端がたちづくられているとさえいえる。

2、それはチョココレートを購入することと、プレゼントとして贈ることが、なんらかの外的な表示（時間差、値札、リボン、包装）でしか区別できないことを示している。

たとえば、バレンタインの日にコンビニの袋に入った板チョコをレシートとともに渡されたとしたら、それがなにを【A】しているのか、戸惑ってしまうだろう。でも同じチョココレートがきれいに包装されてリボンがつけられ、メッセージカードなんか添えられていたら、たとえ中身が同じ商品でも、まったく意味が変わってしまう。ほんの表面的な「印」の違いが、歴然とした差異を生む。

ぼくらは同じチョココレートが人と人とのあいだでやりとりされるのだが、どこかで区別したい行為だと感じている。だから、わざわざ「商品らしさ」や「贈り物らしさ」を演出しているのだ。

ぼくらは人とモノのやりとりを、そのつど経済的な行為にしたり、経済とは関係のない行為にしたりしている。「経済化＝商品らしくすること」は、「脱経済化＝贈り物にすること」との対比のなかで実現する。こうやって日々、みんなが一緒になって④「経済／非経済」を区別するという「きまり」を維持しているのだ。

でも、いったいなぜそんな「きまり」が必要なのだろうか？

ぼくらはいろんなモノを人とやりとりしている。言葉や表情なども含めると、つねになにかを与え、受けとりながら生きている。そうしたモノのやりとりには、「商品交換」と「贈与」とを区別する「きまり」があると書いた。

ひとつ注意すべきなのは、そのモノのやりとりにお金^{II}が介在すれば、つねに「商品交換」になるわけではない、ということだ。結婚式のご祝儀や葬儀の香典、お年玉などを想像すれば、わかるだろう。お金でも、特別な演出（祝儀袋／新札／袱紗／署名）を施すことで贈り物に仕立てあげられる。ふつうは結婚式の受付で、財布からお金を出して渡す人なんていない。

なぜ、わざわざそんな「きまり」を守っているのか？ じつは、この「きまり」をとおして、ぼくらは二種類のモノのやりとりの一方には「なにか」を付け加え、他方からは「なにか」を差し引いている。

それは、「思い」あるいは「感情」と言ってもいいかもしれない。

贈り物である結婚のお祝いは、お金をご祝儀袋に入れてはじめて、「祝福」という思いを込めることができる。と、みんな信じている。

経済的な「交換」の場では、そうした思いや感情はないものとして差し引かれる。マクドナルドの店員の「スマイル」は、けっしてあなたへの好意ではない。そう、みんなわかっている。

経済と非経済との区別は、こうした思いや感情をモノのやりとりに付加したり、除去したりするための装置なのだ。レジでお金を払って商品を受けとる行為には、なんの思いも込められていない。みんなでそう考えることで、それとは異なる演出がなされた結婚式でのお金のやりとりが、特定の思いや感情を表現する行為となる。

それは、光を感じるために闇が必要のように、どちらが欠けてもいけない。経済の「交換」という脱感情化された領域があったはじめて、「贈与」に込められた感情を際立たせることができる。

3

バレンタインのチョコで思いを伝えるためには、

「商品」とは異なる「贈り物」にすることが不可欠なのだ。

この区別は、人と人との関係を意味づける役割を果たしている。

たとえば、「家族」という領域は、まさに「非経済／贈与」の関係として維持されている。家族のあいだのモノのやりとりは、店員と客との経済的な「交換」とはまったく異なる。誰もがそう信じている。

レジでお金を払ったあと、店員から商品を受けとって、泣いて喜ぶ人などいない。

4

日ごろの感謝の気持ちを込めて、

夫や子どもから不意にプレゼントを渡された女性が【B】の涙を流すことは、なにもおかしくない。

このとき女性の家事や育児を経済的な「労働」とみなすことも、贈られたプレゼントをその労働への「対価」とみなすことも避けられる。そうみなすと、レジでのモノのやりとりと変わらなくなってしまふ。

母親が子どもに料理をつくったり、子どもが母の日に花を贈ったりする行為は、子どもへの愛情や親への感謝といった思いにあふれた営みとされる。母親の料理に子どもがお金を払うことなど、ふつうはありえない。そんな家庭は、それだけで「愛がない」と【C】されてしまふ。

子育てとは無償の愛情であり、家族からのプレゼントも日ごろの労働への報酬ではなく、心からの愛情や感謝の印である。それは店でモノを買うような行為とはまったく違う。ぼくらはそのようにしか考えることができない。たとえそのモノが数時間前まで商品棚に並んでいたとしても。

家族のあいだのモノのやりとりが徹底的に「脱経済化」されることで、愛情によって結ばれた関係が強調され、それが「家族」という現実をつくりだしている（なぜ「母親」が脱経済化された領域におかれるのかも、ひとつの問いだ）。

家族という問柄であれば、誰もが最初から愛にあふれているわけではない。それは脱感情化された「経済＝交換」との対比において（なんとか）実現している。

「家族」にせよ、「恋人」にせよ、「友人」にせよ、人と人との関係の距離や質は、モノのやりとりをめぐる経済と非経済という区別をひとつの手がかりとして、みんなでつくりだしているのだ。

（松村圭一郎『うしろめたさの人類学』（ミシマ社）より）

注1・対価：…労力・財物などを人に提供した報酬として受けとる財産上の利益。

問一

1 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、そのうえ イ、そして ウ、でも エ、だから オ、では

問二

【A】～【C】に入る二字のことばを次の漢字を組み合わせて作りなさい。

凶 激 否 識 感 難 意 心 非

問三

……線部Ⅰ・Ⅱの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「屈辱」

ア、重大であること イ、いやな気分になること

ウ、相手に負けて従うこと エ、はずかしい思いをさせられること

Ⅱ「介在」

ア、必要であること イ、二つのもの間にあること

ウ、じゃましていること エ、割りこんでくること

問四

——線部a～dの「で」の中で他とは使い方の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五 〜〜線部X「たとえ」がかかる部分を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

たとえ ほとんど 等価のものが やりとりされて いても、それは売買とは違う。

問六 〜〜線部Y「祝福」と熟語の成り立ちが同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、身体 イ、植樹 ウ、頭痛 エ、開閉

問七 本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直前にくる五字をぬき出しなさい。

でもだからこそ、その商品を購入して、贈り物として人に渡すときには、その「商品らしさ」をきれいにそぎ落として、「贈り物」に仕立てあげなければならない。

問八 ……線で囲まれた部分の1〜4を正しい順序に並べ替え、番号で答えなさい。

問九 ——線部①「ほんのささいな日常の行為のなかで確認していこう」とあるが、確認した結果について述べている部分を含む一文を文中から探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問十 ——線部②「そう」とあるが、それはどういうことか。文中のことばを用いて四十字以内で答えなさい。

問十一 — 線部③ 「ほんの表面的な『印』の違いが、歴然とした差異を生む」とはどういうことか。それを説明した次の文の

1

3

に適切なことばをそれぞれ指定された字数で文中からぬき出しなさい。

1 五字

2 二字

3 三字

のはっきりとした違いにつながるといふこと。

問十二 — 線部④ 「『経済／非経済』を区別するゝ維持しているのだ」とあるが、それはなぜか。その理由にあたる部分を文

中から三十字以内で探し、初めの七字をぬき出しなさい。

問十三 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、私たちがきまりを作るのは、思いや感情をものにこめるためである。
- 2、商品交換の場での笑顔は、商品に付加価値をつけるものである。
- 3、私たちは、脱経済化することによって人間関係を深めている。
- 4、家族という領域においては、経済活動というものは存在しない。

国語 解答用紙

受験番号
氏名

得点

問一	⑤	①
	⑥	②
	③	
	④	

問二	部首
	部首名

問四	人
	色

問三	

問五	

問一	1
	2
	3
	4

問二	A
	B

問三	X
	Y

問四	

問五	

問六	

問七	

問八	

問九	

問十	

問一	1
	2
	3
	4

問二	A
	B
	C

問三	I
	II

問四	

問五	

問六	

問七	

問八	↓
	↓
	↓

問九	

問十	

問十一	

問十二	1
	2
	3

問十三	